

# 令和3年度 入学試験問題

## 国語

九州国際大学付属中学校

### 【注意事項】

- 1 開始合図のチャイムが鳴るまで、この問題用紙の中を見てはいけません。
- 2 開始合図のチャイムが鳴ったら、最初に解答用紙と問題用紙に受験番号・氏名を書きなさい。
- 3 試験時間は50分です。
- 4 解答はすべて、問題の指示にしたがって解答用紙に記入しなさい。
- 5 問題用紙で、印刷がはっきりしないところがあったら、静かに手をあげなさい。
- 6 答案ができあがっても、終了合図のチャイムが鳴るまで静かに着席していなさい。

受験番号				氏名	
------	--	--	--	----	--

四

次の文章をよく読んで、あととの問い合わせに答えなさい。字数指定のある問題は、句読点なども一字と數えます。なお、まだ習っていない漢字については、読みがなを付けたり、ひらがなで表記したりしています。

いくら集中できないといつても、明日は英語の一斉テストがあるとか、締切りの仕事があれば、徹夜も覚悟で④夢中にならざるをえない。 A 、そのようなときは、少々の眠気も疲れも、ふきどんでしまうから⑤アラブシギである。このように、①集中力にはいざといいう時に発揮される瞬発力という威力があることは事実である。

しかし、勉強にしろ、仕事にしろ、息の長いものであり、 B 一瞬にできるものではない。大切なことは、集中力の持続ということである。ところが、短時間の集中ならともかくとして、②かなりの時間、集中するということは難しい。

その理由として、「疲労」をあげる場合が多い。「頭が疲れてよく働かない」「疲れて集中できなくなつた」などと口に出したりする。ところが、人間の頭脳はそう簡単に疲れるものではないというから、本当に疲れたのではなく、別の理由が考えられるのではないかだろうか。

C 、もう疲れて仕事がいやになつたと感じた場合でも、新しい作業に移るといつのまにか疲労感が消えてしまうことが多い。この場合の疲労感は、したがつて⑥厳密にいえば、「飽き」の状態になつた場合の心理的な感じであるといえる。このように、飽きるということは、よく疲れるということと混同されやすい。事実、この両者は同時に現われることが多いが、まったく違つた⑦現象である。飽きるということは、勉強や仕事に興味をなくしてしまい、それを続けるのがいやになつたり、その場から逃げだしたくなるような感情的反応である。これに対して疲労は、勉強や仕事を続けたいという意志があるにもかかわらず、続けることができなくなるような心身の状態をいう。

私たちが疲れて集中力がなくなつたと感じるのは、頭よりも身体の疲れの方からくるものである。もつとも⑧タンジュンな疲労感は筋肉の疲れから生じるといわれているから、長時間、同じ姿勢でワープロやパソコンを⑨ソウサしていれば、当然、疲れて集中できなくなる。一般的にいって、仕事や勉強の能率は五〇分から六〇分を過ぎると低下する傾向があるとされている。

疲労感は、「仕事をもうやめなさい」といういわばストップ・サインのようなものである。しかし、社会生活の中では、このようなサインを無視して仕事を続けなければならぬことが⑩往々にしてある。このような時には、ある程度の仕事の能率を維持しようとして、交感神経系の興奮が高まり、集中力を持続させることができ。だが、これも程度問題である。あまりこのような状態を長く続けると、身体の機能を調整している神経。「心理的な原因によって起る心的な障害」。ストレスが高じ、ノイローゼ状態になつて、かえつて能率がガタ落ちになるばかりか、仕事を放棄せざるをえなくなるよくなことにもなるから、⑪用心に越したことはない。

問一 ━━ a) のカタカナは漢字に直し、漢字は読みをひらがなで書きなさい。

問二 ) ( a) の本文中における意味として適切なものを次から一つ選び、それぞれ記号で答えなさい。

あ 「夢中にならざるをえない」

ア 梦中になんてなれない イ 梦中にならないわけにはいかない

ウ 梦中になつてもよい エ 梦中になつてはいけない

④ 「往々にしてある」

ア 何度もある イ まつたくない ウ たまにある エ 急に始まる

⑤ 「用心に越したことはない」

ア 用心しなくともよい イ 用心してはいけない ウ 用心しなければならない エ 用心するのがいちばんよい

問三

A S C

にあてはまる言葉を、次からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。

ア たとえば イ まるで ウ 決して エ また オ なぜなら

問四

① 「集中力にはいざ」という時に發揮される瞬発力という威力がある」とあります。その例として適切でないものを

次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 計算テストで満点を取るために、徹夜で勉強をした。

イ 学校が休みだったので、長時間問題を解き続けた。

ウ 疲れていたが、明日提出の宿題を終わらせた。

エ 発表の日が迫っているので、一日で作文を覚えた。

問五

② 「かなりの時間、集中するということは難しい」とあります。その理由を次のように説明しました。

に

あてはまる言葉を本文中からそれぞれ指定の字数で書きなさい。

・長時間、仕事や勉強をしていると 1 (二字) た状態になり、その作業に興味をなくしたり、同じ姿勢で作業し続けることによつて 2 (五字) が発生したりして、3 (八字) が低下してしまつから。

**問六** 「疲労」がある状態で仕事に集中し続けると、どのような結果になると筆者は述べていますか。文章中の言葉を使って四十字以内で書きなさい。

**問七** 集中して勉強に取り組むためには、どのような工夫が必要だと思いますか。本文の内容をふまえて考えて書きなさい。

**問八** この文章の論の進め方の工夫として、最も適切なものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 具体例を交えて説明することで、読み手がイメージしやすくなるように工夫している。
- イ 比喩を効果的に用いることで、内容が強く印象づけられるように工夫している。
- ウ 問いと答えを交互に繰り返すことで、読者にとつて分かりやすくなるように工夫している。
- エ 逆接の接続詞を多用することで、筆者の主張が明確になるように工夫している。

三

次の文章をよく読んで、あとの問い合わせに答えなさい。ただし、本文には一部省略があります。また、字数指定のある問題は、句読点なども一字と數えます。なお、まだ習っていない漢字については、読みがなを付けたり、ひらがなで表記したりしています。

小学校を卒業した「私」は、弟の「テツ」と春休みを過ごしている。ある日の夕方、二人で出かけていると、以前テツが眺めていた工場で働く「おばさん」と出会う。おばさんは「今夜のごちそう」を積んだ自転車を押していく、興味津々のテツはおばさんについていく。そのまま帰ろうとしないテツに私は仕方なくついていくのであった。

冷蔵庫、テレビ、足のとれたベッド、扇風機、コタツ、ジューサー、和式便器、自動車、もとはなんだったのかさえわからない、正体不明のもの……ありとあらゆるガラクタを、私たちは見つけた。テニスコートや自動車教習所を通りすぎ、土手からすこし入ったところ。高速道路のコンクリートの巨大な柱の足もとで、クルマの騒音に包まれながら、そこはなんだかひつそりとしている。

おばさんがアルミの洗面器をシャベルで A たたくと、サビだらけのマイクロバスから真っ黒い猫が一匹、そろり、と出てきた。

「おねえちゃん、見て」

冷蔵庫のかげやこわれた下駄箱のむこう側から、猫たちがぱつぱつと、けれど後から後からあらわれた。すごい数だ。おばさんは、バケツのなかのキャベツと煮干しをシャベルですくうと、洗面器やプラスチックのお弁当の①容器に、②手ぎわよくもりつけはじめる。

「ぼく、手伝つてい」

「もつちろん」おばさんがテツにお弁当箱を渡した。

テツはそれを猫たちのほうに運び、そろそろと地面に置く。見慣れない顔にちょっと用心しているみたいだった猫たちも、テツが離れたとたん、わっと寄ってきて食べはじめた。

「はいこれ」ぼんやり見ていた私に、おばさんはずつしり重い洗面器を、どす、と渡した。

「え、だつて」手伝うなんて言つてないんですけど……

「そこの」おばさんは、私に指さす。猫たちはみんな、③キタ伊に鼻の穴をふくらませて、じり、じり、と私のほうに寄つてくる。こわい。

おばさんの指さしたブリキ板の上に、そろそろと洗面器を置こうとすると、猫がいつせいにたかってきたので、あわてて手をひっこめた。私の手まで、食べられちゃたいへんだ。

結局、私とテツはすごくがしい給食当番みたいに猫たちにゴハンをくばり、バケツがカラになつてようやく、そのすさまじい食事

©フウケイに⑩ぱうぜんとした。猫はぜんぶで三十匹はいる。

「猫がキヤベツ食べるとは知らなかつた」テツが@カンシンして言つた。「もつとくわしい本、読まなくちゃだめなんだよね」  
「雑草なんか、よくつまんたりしてゐるよ。レモンとシイタケは苦手なのが多いけど」おばさんは花柄の帽子をとつて、首にまいたタオル  
でおでこをふいてゐる。短い髪の毛にきつく、パーマをかけていて、やっぱりおじさんみたいだ。

「草、食べるの」

「食べる食べる。犬でも猫でも人間でも、やっぱり野菜は食べなくちゃ」おばさんは □B 声で⑨眞面目くさつて言つた。テツは  
野菜がきらいなので、⑩そっぽをむいた。

「あー、助かつた。あんたたちが、さつさとくばつてくれたから、今日はほんとに楽だつた」カラになつたのから順番に、おばさんは  
容器を回収しはじめる。お皿はみんな「なめたように」□C だ。食べ終わつた猫たちは、今度はせつせと体をなめている。

「おばさん、毎日、猫にゴハンやつてるの」私は洗面器をひとつ、自転車のカゴにのせた。  
「そう。毎日二回。朝と夕方」

「どうして」

「どうしてって、ねえ」おばさんは、あはは、と笑つて「どうしてだらうねえ」と、また帽子をかぶつた。

おばさんの家は、木造のすぐ古いアパートだ。鉄の階段をカンカンのぼつていくと、日に焼けて色のうすぼけたドアの横に、アパート  
よりもっと古そうな緑色の洗濯機が置いてある。

「もう帰るよ」私はテツのズボンからはみでたシャツをひっぱつた。これで五度目だ。①でもそのたびに、テツは「え？ なに？」  
と一瞬ふりかえるだけで、おばさんについていってしまう。

部屋に入るとすぐ台所で、ガスコンロの上に、ほとんどはみだしそうなほど大きなアルミのお鍋が置いてあつた。そのお鍋のなかには、  
例のキヤベツと煮干しがまだ半分くらい残つてゐる。

「ほんとによんにあんたたち、帰んなくていいの。もう六時だよ」

「うち、どうせ誰もいないし」テツはあぶなつかしい手つきでオタマを使って、おばさんが持ちあげたお鍋からバケツのなかに、キヤベツ  
を移しかえている。

「おかあさんは」  
「死んじやつた」

「そうなの」おばさんはテツのことを、かわいそうにねえ、というように見つめた。<sup>②私は目の玉がとびだしそうで、あわててぎゅっと目を閉じた。</sup>

「ねえ、今度はどこに行くの」テツはぼそぼそその髪の毛がぴんと突っ立つくらいわくわくしている。

「公園」

「あの池のあるどこ？」

「そう。ボート小屋の裏んどこ」

「猫、いっぱいいる？」

「売るほどいるよ」

「おばさん」

「ん。どしたの」

「おばさん、猫売るの？」

おばさんは、またガーッという感じで笑つた。「そしたら、おばさん大金持ちだろ？ねえ」

テツはぽかんとしている。「おばさん、大金持ちなの？」

私はなんだか恥ずかしくなつて下をむいた。のどの奥まで見えそうなほど笑つていたおばさんは、そんな私のようすに気づいて、まる見えだった金歯をかくすように口もとに手をやつた。今ごろお上品に口をかくしたりして。そつちのほうがよっぽどおかしい。

「おねえちゃん、どしたの」

「べつに」

「なんだよー」

「あのね、あんたはしょっちゅう、アタマのねじ落つことすの。自分じゃ気づいてないみたいだけど」

テツは下をむいた。言ひすぎたかな、と思つたら、自分の足もとをきよろきよろ見まわしている。

おばさんは手で口をおおつたまま、笑いたいのをこらえている。<sup>③顔が赤鬼みたいに真つ赤だ。</sup>たぶん私も、そうだったんじゃないかなと思う。

公園のボート小屋の裏に、猫は十七匹以上集まつてきた。十七匹以上というのは、そこまで数えたところで、食べ終えた猫はさつさといなくなつてしまふし、新しい猫はやってくるしで、何がなんだかわからなくなつてしまつたのだ。みんなにゴハンをくぱり、容器を回収し、おばさんとわかれると、もうお月さまが出ている。<sup>④ほんやりとやわらかなもやに包まれた光のなかを、私とテツは走つた。</sup>

「おかあさん、帰つてゐるよね、きっと」 ちょっと心配そうな声になつてしまつた。

「帰つてゐると思うな。きっとおこると思うな」 そう言いながらも、テツは落ちつきはらつてゐる。ショットちゅうおこられてるから強い。

「ねえ」 ふりかえつてテツを待つた。「あのわばさん、結婚してるとと思つ？」

テツは、え、と私の顔を見た。

「あたし、してないと思うな」 私はテツと並んで走りだした。

「どうして」

「台所の奥、畳の部屋、だつたでしょ。タンスと、テレビと、おりたたみのちいさなテーブル。それしか、置いてなかつた。冷蔵庫だつて、すゞい、ちつちやかつた」 走りながらしゃべつてゐるから、息が   ※   。

「おねえちゃんて、そういうところは、よく見てんだねー」 テツが眉毛を寄せると、へのへのもへじみたいな顔になる。

「悪い？」

「悪い。人の家、じろじろ見ちゃいけないって、おばあちゃんが言つてたもん」

「じろじろなんか見てないわよ」 すこしむつとして、一気にスピードをあげた。「おかあさんのこと殺したりして。言いつけてやるからね！」

全速力で走るといいのは、自分の足音が、必ず自分より後ろに聞こえるつてことだ。頭の上から降つてきていたその音が、後ろの、低いところではじけるように聞こえはじめる。足音のやつをもつと引き離し、もつと速く、どこまでも走れるような気がしてくる。でもスニーカーがアスファルトをける音はしつこくついてきて、苦しくなつた私は立ち止まつた。

両手を膝にあて、犬みたいに呼吸した。心臓が激しく動悸どうきを打つ音を全身で聞きながら、片方の手でにぎりこぶしを作り、じつと見つめる。人間の心臓は、その人にぎりこぶしと同じくらいの大きさなんだ。だけど私は、どんなに遠くまで行つても、どんなにたくさんの人と会つても、自分の心臓をこの目で見ることだけはぜつたいにならないんだろう。私の見たこともないものが、私を動かしていると思うと、ときどきすぐ不安になる。そういうとき、私は走りたくなる、今みたいに。

ふりかえると、街灯に照らされたテツの白っぽい顔が、夜の道をひょこひょこ上下しながら追つてくる。なによあの顔ウーパールーパーそつくりじゃないの、と思つて見つて見つてみると、私のところで止まりもせずに、テツはひょろひょろの幽靈ゆうれいみたいにすり抜けていった。「ちょっとー。待つてあげたんでしょ」

(5) そして今度はふたりとも、家まで一度も止まらずに走り続けた。

問一　＝＝＝@のカタカナは漢字に直し、漢字は読みをひらがなで書きなさい。

問二　～～あ～うの本文中における意味として適切なものを次から一つ選び、それぞれ記号で答えなさい。

Ⓐ 「手ぎわよく」

Ⓑ 「とてもきれいに」

Ⓒ 「ていねいに」

Ⓓ 「ぼうぜんとした」

Ⓔ 「ぼうぜんとした」

Ⓕ 「そっぽをむいた」

Ⓖ 「悲しくなつた」

Ⓗ 「はずかしくなつた」

Ⓘ 「いらだつた」

Ⓛ 「おどろきあきれた」

Ⓜ 「無視をした」

Ⓝ 「くやしかつた」

Ⓣ 「あきれた」

Ⓤ 「照れた」

問三　Ⓐ，Ⓑにあてはまる言葉を次から一つずつ選び、それぞれ記号で答えなさい。

Ⓐ ちらちら サイ ぴかぴか ウ カリカリ エ カンカン オ ガラガラ

問四

――①「でもそのたびに、テツは「え？ なに？」と一瞬ふりかえるだけで、おばさんについていつてしまふ」とあります。このときのテツは、どのような様子ですか。次の文の□にあてはまる言葉を本文中から八字で抜き出しなさい。

・猫のえさやりを手伝つたり、新たな発見があつたりと今まで経験したことのないことにふれて□様子。

問五

――②「私は目の玉がとびだしそうで、あわててぎゅっと目を閉じた」とありますが、私はなぜこのような動作をしたのですか。その理由を三十字以内で説明しなさい。

問六

――③「顔が赤鬼みたいに真つ赤だ」とあります。このときのおばさんの気持ちの説明として適切なものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

Ⓐ 金歯がまる見えになつていて、気がつき、恥ずかしくなつていてる。

Ⓑ 年下のテツに厳しいことを言った私に対して、いらだつていてる。

Ⓒ 本当にねじを探すテツを見て、笑いそうになるのを必死にがまんしててる。

Ⓓ 手伝いもせずにふざけるテツと私に怒りをあらわにしててる。

問七

□※ あてはまる最も適切な言葉を次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 通う イ 合つ ウ 続く エ 切れる オ かかる

問八

——④「ほんやりとやわらかなもやに包まれた光のなかを、私とテツは走った」から——⑤「そして今度はふたりとも、家まで一度も止まらずに走り続けた」に至るまでの「私」の気持ちの移り変わりを次のように説明しました。

□ 1 □ 3 □ には、あてはまる言葉を本文中からそれぞれ指定の字数で書き抜き、□ \* □ には、あてはまる言葉をひらがな五字以内で自分で考えて書きなさい。

・まず、家に帰るのが遅くなりおかあさんに怒られるのではないかと □ 1 (二字) □ になつてテツと駆け出した。次に、テツの言葉に □ 2 (二字) □ 一人で駆け出しているあいだ、自分自身と向き合うことによつて □ 3 (二字) □ な気持ちになつた。しかし、後から追いついてきたウーパールーパーにそつくりな弟の顔やすり抜けていく姿を見て、気持ちが少し □ \* □ 。

問九 この文章の表現の特徴について、最も適切なものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 「すぐくいそがしい給食当番みたい」や「やつぱりおじさんみたい」などのたとえを示すことで、私が感じた素直な印象をわかりやすく表現している。

イ おばさんが鉄の階段をのぼる音を「カンカン」と表現することで、心の中でなかなか帰らない私とテツにいらだつているおばさんの様子を表している。

ウ 「騒音に包まれながら、ひつそりとしている」や「ほんやりとやわらかなもやに包まれた光」などの周りの様子を示す表現によつて、近いうち、私とテツとの仲が悪くなることを予感させている。

エ 「おねえちゃん、どしたの」「べつに」「なんだよ」など私とテツの会話文を短くすることで、実は二人の仲が悪いということを読者にほのめかしている。

## 三

次の各問い合わせに答えなさい。

## 問一

次のことわざと似た意味のことわざを次のなかから一つ選び、記号で答えなさい。

- ① さるもの木から落ちる  
ア 馬の耳に念仏  
イ かつぱの川流れ  
ウ 木を見て森を見ず  
エ 立つ鳥あとをにごさず
- ② ちりも積もれば山となる  
ア 船頭多くして船山に上る  
イ 三つ子の魂百まで  
ウ ローマは一日にして成らず  
エ 果報は寝て待て
- ③ 恩をあだで返す  
ア 海老で鯛を釣る  
イ 飼い犬に手を噛まれる  
ウ 能ある鷹は爪を隠す  
エ 二兎を追う者は一兎をも得ず

## 問二

次の□に同じ漢字を入れると四字熟語ができます。□に入れるべき漢字一字をそれぞれ答えなさい。

- ① 作文のテーマが難しかったので、書き上げるまでに四□ハ□した。  
② 兄に□三□四、「あの本を返して」と言っているが、ちつとも返してくれない。  
③ あの選手は、点が欲しいところで□発□中でホームランを打ってくれる。

## 問三

次のカタカナの漢字と同じ漢字のものを記号で選び、さらにその漢字一字を書きなさい。

- ① 相手は強いので油断タイ敵だ。  
ア 時間が来たので次の人と交タイする。  
イ 日ごろの生活タイ度から見直すべきだ。  
ウ あのチームとのタイ戦成績は五分五分だ。  
エ コンクールでタイ賞をいただいた。
- ② 日本の通力単位は「円」だ。  
ア 力去をふり返らずに前を向こう。  
イ 目の前を力物列車が走っていく。  
ウ 親の許力を得て、おこづかいでゲームを買った。  
エ この土器は歴史的に大変力値のあるものだ。  
マラソンの先トウ集団は三人になつた。
- ③ 面接を受けてアルバイトにサイ用された。  
ア 地震などのサイ害に備えておく。  
イ 母は私に一サイ何も言わなかつた。  
ウ この絵はサイ部にまでこだわって制作した。
- ④ 生徒会長はトウ票で決めることにした。  
エ 夏休みに昆虫サイ集をしに森へ行つた。  
ウ 秀吉は天下トウ一を成しとげた。  
エ ドラマの主人公がトウ場した。